

人権ほつと六年八月号

「正しくあることとは」

大阪教育大学

藪田 直子

大学で1年生の大人数講義を担当しています。私の勤務校は教育大学なので、多くの学生がすでに入学時点で教職をめざしています。授業の内容はダイバーシティ（多様性）の尊重と人権教育。「担任するクラスに性的マイノリティの子どもがいたら？」「現代日本の差別問題や人権状況は？」など重く深い内容で、かつ現代的で複雑なものばかりです。学生たちの様子を見ていると「間違えたくない」「人とぶつかりたくない（傷つけたくない）」という意識が大変強いように見受けられます。もちろん、将来教育に関わる学生も多いので、間違いだらけではいけません。でも、いわゆる真面目な学生ほど間違えることへの不安が大きいようで、そこまでプレッシャーに感じなくてもよいのではと心配してしまうケースもある。

ります。

多様な社会の中で、常に正しくあることは容易ではありません。例えば WHO は、2019 年まで「性同一性障害」を精神障害の1つとして扱ってきましたが（国際疾病分類）現在は、病気や障害ではないと定義しています。このように知識は常にアップデートが必要で、また膨大な知識を蓄えていたとしても、人によっては捉え方や受け止め方が異なり、唯一の「正しい」マニュアルはありません。では、私たちはどうすればいいのか。

杉田俊介さんの著書（『マジョリティ男性にとつてまっとうさとは何か #MeToo に加われない男たち』（2021年、集英社新書）から印象的な一節を紹介します。「複雑なものを複雑なまま、めんどくさいものをめんどくさいまま、粘り強く考え続けていくこと。（p.120）」強くゆるぎない正しさではなく、のたうち回り弱さをも内包した「まっとうさ」（倫理的、理性的態度）に

ついて考察し、議論している
本です。「正しさ」にモヤモヤ
させられているあなたにきつ
とヒントを与えてくれますよ。